



Title	Phase と Aspect
Author(s)	家木, 康宏
Citation	Osaka Literary Review. 1980, 19, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25612
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Phase と Aspect

家 木 康 宏

完了形の機能が Phase という概念で記述できるということについてはこれまでも述べる機会があった。¹⁾ 問題は従来の Aspect ではどうかということである。一見, Aspect でも同じことがいえるようであるが, 実際には Aspect の定義が不充份であって, 従来考えられていたようにはうまくいかないのである。

一方, 完了形としばしば対比されて論じられる進行形が Aspect という概念で記述できるということには異論はないようである。そして進行形が完了形とよく共起するという事実から両者を同じ category に属すると考えるべきであるという意見もある。もちろん両者が共起することの裏には何らかの共通性があると思われるが, それ以外の点については共通性は見あたらない。むしろこの両者の間には相違点が多いのである。そして, その相違は Phase と Aspect の相違につながるのである。

そこで小論では Phase と Aspect の対立を, 完了形と進行形によって代表させ, 両者の違いを明らかにすることによって, それぞれが代表する Phase と Aspect との違いをも明らかにしたい。そして完了形の本質的な機能は, Phase という概念によってのみ記述されるべきであることを示したい。

1. Aspect の定義

従来完了形を Aspect という概念でとらえるという立場が有力であったが, Aspect という概念についての定義がはっきりしていなかったように思う。もちろん一応は Aspect の定義はされており, 種々の Aspects の分類もされている。²⁾ 一例をあげれば perfective vs. imperfective, dura-

tive vs. punctual などである。

これらの分類の妥当性はともかくとして、決定的な不備はこの分類が動詞又は動詞句の Aspect の分類にすぎないということである。たとえば、perfective aspect は動作全体を考えてその完結を表わすというものである。これが正しければ完了形だけでなく単純過去でも perfective aspect を表わすことができる。

- (1) John finished the work at noon.
- (2) John has finished the work.
- (3) John tore down his stables in one day. ³⁾

このように考えると perfective aspect を表わし得る form は完了形に限らないということになる。むろん、これは完了形が perfective aspect を表わし得ないということの意味するものではないが、このことだけをもって完了形を Aspect の一つであるとする見方には説得力がない。Perfective aspect を表わす文を調べてみると、その動詞もしくは動詞句そのものに完結性があることがわかる。(e.g. *finish*, *tore down*) そこで、いわゆる perfective aspect を表わすものは form ではなく、むしろ動詞(句)そのものの性質・意味であるという仮説が成り立つ。

またいわゆる resultative aspect についても結果ということは event の存在なしには成立しない。むしろ event があることによってその結果が含意されると考えた方が正しい。この場合にも動詞(句)の意味が関与してくる。次の文では *lose* という動詞の性質により、結果としての状態として「所有しない」という含意が成りたつのである。従って単純過去でも結果としての状態を含意することができる。⁴⁾

- (4) I have lost my purse.
- (5) I lost my purse.

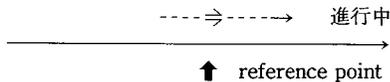
次の例でも同様である。

- (6) I've cut my finger.
- (7) I cut my finger.

(6)が“*It's still bleeding*”という含意をもち、(7)の方は必ずしもそれをもたないということは‘*Current relevance*’を認める立場の主張である。しかし「血が出る」という結果としての状態は‘*cut one's finger*’という動詞句のもつ含意によるものであるからどちらの例も（出血の時点は違うが）*bleeding* ということを含意する。⁵⁾

このように考えると、従来単に Aspect として考えられていることは、動詞（句）の性質、動詞（句）自体の Aspect であるということになり、完了形が属するかどうかが問題となるような Grammatical Aspect とはレベルが異なるといわねばならない。そこで Grammatical Aspect の定義を再検討するの必要が生じてくる。このことを考える上で有用なのは進行形である。進行形が Aspect に属するということは明らかである。そこで Aspect を定義する上で進行形の扱いを参照するのは有意義であると思う。

進行形そのものの意味機能については後でふれることにして、まず進行形で表わされている動作を考える時に問題となる事柄は何であろうか。それはいかなる観点において動作が進行中であるとするかということである。進行形の意味するところは、ある一点において、動作が進行中である、ということだと思う。図示すれば次のようになる。⁶⁾



この一点（以下 reference point と呼ぶ）の設定時が現在時であれば現在進行形、過去時であれば過去進行形となるのである。

このように考えると進行形を考える上で基準となる一点を設定することが重要となる。ある一点における動作の様態を見るということ、これが進行形の本質であり、Aspect の本質であるのではなからうか。

ここにおいて Grammatical Aspect の定義を次のように定める。

(8) Aspect: 基準となる一点を設定し、その一点における動作の様態を問題にする。

この定義をもとにして完了形が適切に記述できるかどうか、進行形との比較を通じて以下の節で明らかにしてゆきたい。

2. Reference Point に関する完了形と進行形の違い

2. 1 Leech (1971) は進行形について以下のように述べている。

The Progressive Aspect generally has the effect of surrounding a particular event or moment by a 'temporal frame', which can be diagrammed simply:  (p.17)

要するに進行形では、ある 'particular event or moment' を reference point として設定し、その frame という形で持続する動作を考えるのである。これは現在・過去進行形に共通である。

(9) He is writing (now).

(10) He was writing when I entered.

このようにある一点から動作を考えるという見方は Aspect という概念にも合致する。即ちある event を異なった reference point から見るというのは Aspect の違いである。

2. 2 これに対して完了形はどうか。完了形とは異なり、その reference point における動作の様態を問題にするのではない。また進行形の場合は reference point は常に事象 (event) と同じ時点にあった。図示すれば次のようになる。⁷⁾

(11) Past Progressive : E, R _____ S E : Event Time
 Present Progressive : E, R, S R : Reference Time
 (Future Progressive : S _____ E, R) S : Speech Time

一方完了形の場合、event time と reference time とは違う時点に存在すると考えられる。⁸⁾

(12) Past Perfect : E — R — S
 Present Perfect : E — R, S
 (Future Perfect : S — E — R)

こうしてみると、完了形の reference point は進行形のそれとは役割が異なったものであることがわかる。少なくとも進行形のように、その reference point における動作の様態が問題になるのではないといえる。

これについては完了形でも reference point において動作が完了しているとか継続しているということが問題になるのではないかという反論が予想される。しかし進行形が基準となる reference point において、動作が進行していればその文が真であるというような単純明快な真理条件をもち、しかもそれが動詞の性質にほとんど影響をうけないのに対し、完了形ではいわゆる4つの用法についてそれぞれ異なった真理条件をもつ。その上完了・結果・継続・経験の4用法が動詞(句)の性質によって左右されることはよく知られている。

従って完了形は進行形のような Aspect 的な reference point をもたないということがわかる。では完了形の reference point の働きとはどのようなものであろうか。

完了形の reference point は単に point として一点を指定する働きをもつのではなく、基準となる一点から過去にさかのぼる不定時の範囲を定める機能をもつ。つまり point ではなく range のように考えるのである。これが進行形の Aspect 的な reference point と異なる点である。進行形の表わす動作も確かにある広がりをもつ。しかしそれは動作の広がりであって reference point の広がりではない。進行形で問題となるのはあくまで一つの reference point において動作が進行中であるということである。

ところが完了形の場合そうではない。その reference time は、ある一点(現在完了ならば現在時、過去完了ならば過去の一点)を特定し、その点を含み、それ以前の不定時に refer する働きをもつ。いかえれば進行形のように particular point を指定するのではなく、範囲を指定することになる。そしてその範囲とは動作の生起した範囲をさす。この点では、Mc.Cawley (1971) の 'range' の議論と共通するところがあるように思う。

3. Modal 的要素に関する完了形と進行形の違い

完了形と進行形のもう一つの違いは modal な扱いができるかどうかである。

進行形には継続, 有限の継続, 未完了という3つの根本用法がある。⁹⁾

(13) The house is falling down.

(14) I am living in Wimbledon.

(15) The bus is stopping.

第3の未完了という用法は過去完了に特によく現われる。

Dowty (1977) は進行形には modal な取扱いが必要であると言っている。

(16) John was drawing a circle.

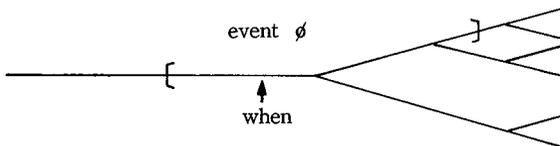
上の文は円が実際に完成したかどうかについては言及しない。これは動詞句の accomplishment という性質に負うところも多いが (cf. 'John was pushing a cart') 同時に進行形自体のもつ性質によるのである。

また進行形には動作の中断ということも contextual ではあるにせよ含意することができる。

(17) John was watching TV when he fell asleep.

(18) John was watching TV when Bill entered the room.

上の2文を比べた場合, 前者が watching TV の中断 (中止) を含意するのに対し, 後者は必ずしもそうではない。しかし両方とも同じ動詞の進行形の文である以上同一の機能をもつはずである。Dowty (1977) はこのような文に, 「when 節で指示される時点を越えて動作が継続 (進行) することが可能であった」という意味解釈を与えることにより解決しようとする。即ち進行形の文は次のような possible worlds の枝分かれを想定する。¹⁰⁾



こうして進行形はその reference point を越えた時間における possible worlds を想定するという機能をもつ点で modal な要素をもつと考えることができる。進行形が未来を表わすのにも使われるということもこれによって説明できる。

これとは逆に完了形ではそのような機能を想定することができない。完了形は本質的に未来志向的でない。これは過去形と似ている。

(19) John has drawn a circle.

という場合、動作の完了(円の完成)を明らかに含意する。完了進行形の場合、やや微妙であるが、やはり完了形の性質が強く現われると考えられる。

(20) John has been drawing a circle.

また未来完了のような場合でも possible world の想定はできない。過去形と同じように modal な扱いよりもむしろ Tense 的に処理する方が適当なようである。

この節における議論は Aspect について直接議論したものではないが、完了形と進行形の違いを明らかにすることによって、その共通点にもかかわらず、両者は別の category に属すると考えるべきであるという主張の根拠の一つになると思われる。

4. 完了形と Phase

4.1 進行形は以上見たようにある reference point を定めておき、その時点において動作が進行中であることをその主たる機能とする。それでは完了形はどのような機能をもつのであろうか。完了形の reference time が広い範囲をもつものであることは前述した。では動作のとらえ方はどうであろうか。進行形からの類推によってその reference time 内において動作が完了したとか継続したとかいったようなことではない。それらは動詞(句)の意味に依存する。

それでは完了形という形式自体のもつ機能とは何か。それを見るために二、三の例を考えてみよう。

- (21) 'The paper-chase is worth the climb,' said Phyllis, 'if we don't lose it. Let's get on. It's all downhill now.'
 'I said that ten minutes ago.' said Peter.
 'Well, I've said it now,' said Phyllis, 'come on.'
- E. Nesbit, *The Railway Children*.

- (22) "We've been so happy."
 "Happy? Of course we've been happy. We *are* happy."
- A. Christie, *Evil Under the Sun*.

(21)の例において、Peter の発言（過去形）と Phyllis の後の発言（現在完了）とを比べると両者の機能の違いは明らかである。Phyllis の発言からは10分前とは状況が変わったことがうかがえる。「今その言ってるのは私なのよ」という contrastive な含みがある。二つの状況を対照するということは両者の間の断絶を認めていることであるから、これはとりもなおさず状況の変化（局面の変化）を表わしているといえる。

また、(22)の例についても同様のことがいえる。前の話者の言いたいことは「今までずっと幸福だったが、私たちはもう幸福ではない」ということである。一方、後の話者は今まで幸福であったことは認めるが、同時に彼らの幸福はまだ終わっていないと主張する。そのために完了形を使わず、“We are happy.”と現在形を用いているのである。これを見ても最初の話者の完了形には(21)の例と同じように2つの状況を比べてそこに断絶（局面の変化）を見出し、そのことを主張しているという働きが見られる。

そうすると完了形の機能は、現在から過去にさかのぼる時間内において何らかの局面の変化を指示するということにあるのだといえる。このような機能は先に定義した Aspect の概念では説明できない。一つの時点から物事を見るのではなく、時間的な広がりの中での物事の状況（局面）を考えなければ完了形の本質は理解できない。Aspect ではなく、局面の変化を表わす Phase という category を考えることによつてのみその機能を明確に記述することができるのである。

4. 2 Aspect が一つの reference point から event を見るのに対し、

Phase は一つの event の生起を、時間の広がりの中で、その変化に焦点をあてる。この意味で Phase は temporal な category であるといえるかもしれない。これは Tense 的ということではむしろない。むしろ Tense とちがって形式に束縛されない temporal な category であると思える。これまでも temporal な立場から完了形をとらえるという研究はいくつか見られるが、(Bauer (1970), Kyoko Inoue (1979) など) それらの研究では明確に Phase のような category を設定するまでには至っていないようである。

ここにおいてあらためて Phase という category の定義を行なう。

(23) Phase : ある一つの event の phase (局面) の変化を時間の広がりの中でとらえる。

一つの event は生起してから完了・終結するまでにいろいろな phase (局面) を経て変化していく。その生起そのものが何らかの変化を内在している場合もあるし、その完了が、またさらにその event の結果によって別の phase が生じることがあるかもしれない。いずれにしても、このような変化をとらえるために完了形が使われるのだと考えることができる。

またこれとは別に談話レベルにおける topic の変化, new information の導入などという観点からも phase の変化ということを考えることができる。有名な

(24) Einstein has visited Princeton.

という例もこのような観点から、即ち、Princeton が topic であるような discourse に新しい情報、新しい局面を導入するという場合に完了形が使われることができるというのは、完了形がもつ局面の変化という機能によって説明することができる。

このような談話レベルでの topic を問題にするという立場は Kyoko Inoue (1979) にも見られる。

I consider discourse topic to refer to a proposition about which the speaker is either providing or requesting new information, in this case,

by means of a sentence in the present perfect. (p.574)

以上見てきたような局面の変化の指示ということは現在完了ばかりでなく過去完了でも同じような機能として現われる。その場合には過去完了自体の機能の他に副詞句のもつ性質が関与していることが多い。またある場合には動詞自体の性質が影響を与えることもある。¹¹⁾ 同じ完了形であっても現在完了と過去完了の間には単なる tense の違いだけとはいきれない相違点があるのかもしれないが、それについては、稿を改めたいと思う。

5. 結 び

Aspect がある一つの reference point を設定し、その reference point における動作の様態を記述するのに対し、Phase は時間の広がりの中において一つの動作 (event) の変化をとらえて記述するのである。Aspect が時間軸上においてある一瞬を切りとるのに対し、Phase は連続した時間、連続した瞬間の sequence を考える。Aspect が静止した一コマであるとしたら Phase はそのコマを連続してできる映像のようなものである。¹²⁾

このような定義を設定した上であらためて進行形・完了形を再考してみると、上で見たことがたいへんうまく説明できる。進行形は各瞬間における状態を切りとる働きをもつし、完了形はその瞬間をつないで一つの動作の局面の変化を記述する働きをもつ。

以上、概観的ではあったが Aspect と Phase, そして進行形と完了形の相違を考察してきた。それによって Aspect と Phase の違いは明らかになったと思う。進行形と完了形ははっきりとその性格を異にしている。完了形は Aspect では説明できないことも明らかになったと思う。

今後はさらに個々の例にあたってみることによりこの二つの form の関係がはっきりすると思われるし、またこの二つの form 以外に Phase, Aspect にあてはまるような表現形式があるかどうか探究することが可能であるし重要であると思う。

注

- 1) Cf. Ieki (1980).
- 2) Cf. Comrie (1976).
- 3) 例文は Gallagher (1970a) による。
- 4) 現在時についてみれば単純過去ではそのような含意が必ずしも成立するとは限らない。しかしその場合の完了形の文との違いは Aspect の違いではなく Tense 又は Phase による違いであると考えればよい。
- 5) その含意とは、たとえば完了形の場合は 'It is (still) bleeding' 過去形の場合は 'It was bleeding' のようなものである。
- 6) 厳密に考えればある一点（瞬間）では動作は静止していると考えられるが、ここではそういう問題には立ち入らずに直観的な意味である一点をとった場合、その時点において動作が進行中であると考えことにする。
- 7) Hornstein (1977) による。
- 8) 実際には後述するように完了形のもつ reference time は point というよりも reference の範囲を示すと考えた方がよい。
- 9) Leech (1971), pp. 14-17.
- 10) Dowty 自身は possible world という用語を使わずに possible future という用語を使っているが、実際のところ両者は同じ事だと考えてもよい。
- 11) Cf. Ieki (1980).
- 12) 別の言い方をすれば Phase とは Aspect の連鎖であるということも可能であるかもしれない。だからといってどちらかがどちらかに含まれるというものでもないと思う。

References

- Bauer, G. (1970) "The English 'Perfect' Reconsidered", *Journal of Linguistics*, No. 6.
- Chomsky, N. (1971) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation" in D. Steinberg and L. Jakobovits eds. *Semantics*, Cambridge University Press.
- Curme, G. (1931) *Syntax*, Boston, D. C. Heath & Co.
- Dowty, D. (1977) "Toward a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English 'Imperfective' Progressive" *Linguistics and Philosophy*, Vol. 1. No. 1.

- Gallagher, M. (1970a) *Have and the Perfect in English*, University Microfilms, Ann Arbor.
- . (1970b) “Adverbs of Time and Tense”, *CLS*. 6.
- Hornstein, N. (1977) “Towards a Theory of Tense”,
Linguistic Inquiry, No. 8.
- 細江逸記. (1951) 『動詞時制の研究』 東京・泰文堂
- Ieki, Y. (1980) “Towards a Theory of Phase”, Unpublished M.A. Thesis, Osaka University.
- Inoue, Kyoko. (1978) “How Many Senses Does the English Present Perfect Have ?” *CLS*. 14.
- . (1979) “An Analysis of the English Present Perfect”, *Linguistics*, 17.
- Joos, M. (1964) *The English Verb : Form and Meanings*, University of Wisconsin Press.
- Leech, G. (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman.
- McCawley, J. (1971) “Tense and Time Reference in English”, in C. Fillmore and D. Langendoen eds. *Studies in Linguistic Semantics*, Holt, Rinehart and Winston Inc.
- McCoard, R. W. (1978) *The English Perfect : Tense Choice and Pragmatic Inferences*, North Holland.
- 毛利可信. (1972) 『意味論から見た英文法』 大修館
- . (1980) 『英語の語用論』 大修館
- 中村芳久. (1979) 「時間意識と英語の時制・相」 *Cairn*. No.22.
- 大塚高信. (1938) 『英文法論考—批判と実践』 研究社
- Palmer, F. R. (1974) *The English Verb*, Longman.
- 島田守. (1980) 「現在完了形の意味論的・語用論的考察」 『毛利可信教授退官記念論文集』
- Zydatiņ, W. (1978) “Continuative’ and ‘Resultative’ Perfects in English ?” *Lingua* 44.